文化論集第 55 号
２０１９年９月

早稲田大学會津八一記念博物館所蔵「安藤更生旧蔵」周作人関連資料

徳泉さち

论文摘要：早稻田大学会津八一记念博物馆收有安藤更生（1900～1970）所遗赠之有关周作人资料。安藤是早稻田大学教授，长期讲授东方美术史。任教授前，他曾经赴北京在日中合资的新民印书馆工作。在北京逗留期间，受到周作人的知遇，安藤敬爱周作人之为人以及渊博学识，拜周为师。1946 年日本投降后，安藤回日本，但仍保持通信联系。1962 年安藤作为日本文化代表团团长重访北京，与周作人阔别重逢。恐怕唯一见到暮年周作人的日本人。本文试图通过介绍会津八一记念博物馆收藏的周作人书简以及安藤更生旧藏的周作人字画的概要，描绘出他们的交流情况。

关键词：周作人；安藤更生；新民印书馆；会津八一；

はじめに

早稲田大学會津八一記念博物館は、早稲田大学本部キャンパス内に位置し、創立 20 周年を迎えた博物館である。博物館に名を冠する會津八一（1881～1956）は、書家、歌人として著名な人物であり、特に、奈良の古寺や古仏を詠んだ歌はひろく親しまれてきた。芸術家であると同時に、會津は早稲田大学教授として東洋美術史を講じた美術史研究者でもあった。彼は美術史の教育や研

究には実物に触れることが最も重要である、という強い信念をもっていた。そのため、私財をはたき古美術品の収集に奔走し、中国の書画、鏡、明器などを買い集めた。これらの資料は會津の門弟達により大事に受け継がれて、その収集品の保管と公開のために設立されたのが、当館である。開館以後、大学関係者や篤志家の方々より多くの寄贈を受け、現在は考古資料や民族資料、日本近現代の美術作品など、2万点を超える収蔵品を誇る博物館になった。

当館は早稲田大学の文化遺産を保存、公開する場として、学内の学生だけでなく、一般の来客者にも広く親しまれている。

1　安藤更生と周作人の交流

2016年、特別企画展として「安藤更生コレクション受贈記念　會津八一と安藤更生―學藝の継承―」展が開催された[1]。安藤更生（1900～1970）は、會津八一の高弟として知られ、會津の後を継ぎ早稲田大学文学部で長らく教鞭をとり、東洋美術史を講じた人物である。中国、日本美術をはじめ、鑑真やミイラ研究の進展に大きな足跡を残した。會津は、大学赴任以前に中学校の英語教師として働いており、安藤とは中学校教師と生徒として出会った。會津が没するまで、四十年に及ぶ師弟関係が続き、師の学芸を余すところなく安藤は継承した。近年、安藤家ご親族の厚意により当館に安藤氏の旧蔵品が寄贈された。展覧会では、主に會津と安藤の交流を伝える資料が中心に出品され、盛況のうちに閉幕した。

安藤が終生、會津を深く敬愛したことはよく知られるが、彼が私淑したもう一人の人物として周作人が挙げられる。この度、当館に寄贈された安藤氏の旧蔵品には、周作人に関連する資料が多数含まれていた。本稿では、これらの資

1　本展覧会の概要は図録『安藤更生コレクション受贈記念會津八一と安藤更生―學藝の継承―』（2016年、早稲田大学會津八一記念博物館）に詳しい。また、安藤更生氏の経歴や著作については、安藤更生年譜作成委員会『安藤更生年譜・著作目録』（1972年）を参照。

料の概要を紹介し、安藤と周との出会いからはじめ、二人の長年に及ぶ交流を追ってみたい。

安藤が周の知遇を得たのは、安藤が北京に滞在していた時期（1938 年から 1945 年まで）に遡る。安藤は 1924 年（大正 13）早稲田大学仏文科を中退後、建築会社あめりか屋に入社し、雑誌「住宅」の編集長を務めた。その後、平凡社に勤務し、大百科事典の審査部員を担当している。1937 年、当時の平凡社社長であった下中弥三郎（1878～1961）は日中合弁の印刷会社、新民印書館の立ち上げを計画していた。安藤は現地での調整役として北京に派遣されることになったという。1938 年、新民印書館は北京に設立され、1945 年 8 月の終戦までの 7 年間さまざまな印刷、出版活動を展開した[2]。安藤は新民印書館の編集課長に任じられ、1938 年北京へと転居している（当時 39 歳）。また、下中は新民印書館の外郭団体として 1942 年に中国文化振興会を組織し、安藤はその運営庶務を任された。この会は戦時の高物価の下で不如意な暮らしを送る中国文化人を援助し、良書を発行することを目的に掲げていた。会長として曹如霖が迎えられ、周作人は委員になっている[3]。こうした機縁より周との交流がはじまったのであろう。度々周のアドバイスを受けながら、新雑誌の創刊や、書籍の編集や発行などの実務を安藤が担当していた。そのなかで安藤は周の深い学識にふれて感銘を受け、またその人柄に尊敬を寄せるようになったという。安藤の年譜の 1943 年の項には「二月、北京市内四区東観音寺胡同に移居。近くに恩師周作人邸あり。」とあり、住居も近所であった。翌 1944 年の項には「恩師周作人六十歳の誕辰に、唯一の日本人として門弟の列に加わる」とも記され、交流の深まりをつたえる[4]。安藤は 1945 年、終戦とともに日本に引き揚げるが、書簡の遣り取りにより二人の交流は続いた（これら書簡については

2　黄漢青「新民印書館について」『慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』（No 41、2009 年）を参照。
3　下中弥三郎伝刊行会『下中弥三郎辞典』（平凡社、1965 年、「中国文化振興会」の項目）を参照。
4　『安藤更生年譜・著作目録』（29・30 頁）を参照。

後に詳述)。安藤の書簡によれば、何度か来華の計画があったようだがなかなか二人の面会は実現せず、安藤が周と再会したのは1963年10月で、およそ20年ぶりの対面となった[5]。安藤は北京滞在時より、揚州から奈良へと渡った仏僧である鑑真の研究を続け、1953年（昭和28）には博士論文として『鑑真大和上伝之研究』を完成させた。そのため、1963年、鑑真和上円寂一千二百年記念「訪中日本文化界代表団」が組織され、中国に招かれた際には安藤が団長に選ばれた。この時、安藤は周作人に面会することを訪中の条件として強く提示したという。調整は難航したようだが宿願が叶い、同じく會津門下である宮川寅雄（和光大学教授）とともにほぼ20年ぶりに周宅の門を叩いた。すっかり荒れ寂れた庭に愕然としながらも「温顔は旧の如く、思ったよりは元気である。」とし、周が翻訳した『古事記』を受け取り、旧交を温めた旨を綴っている。安藤は訪問記を「齢ひ八十一の老先生の起居は、果していかがであろうか。」と結んだ。この訪問から3年後、周宅に紅衛兵たちが押し込むことになろうとは、この時の安藤は予想していなかったであろう。1960年代、周を慕う日本人には、面会を望みながらも果たせずに帰国する者も多くいたという。その中で安藤は周の晩年に面会し得た稀有な日本人といえる[6]。

以下、当館所蔵の周作人関連資料（書簡・書作品・會津八一書「大仏讃歌」(周作人跋文付き)）についてその概要を紹介していきたい。

2　安藤更生・周作人往来書簡

当館は、周が安藤に宛てた書簡47通（以下、周書簡という）を所蔵する。

5　この訪問については、安藤更生「苦雨斎訪問記」(『大安』10-11、1964年）に詳しい。なお、本稿については、林敏潔による中文訳が『中国現代文学研究叢刊』2017年7期、216～219頁）に掲載されている。

6　例えば、目加田誠（九州大学名誉教授・中国文学研究者）は1965年に訪中学術代表団の一員として北京を訪れるも、周作人との面会は果たせなかった。(小川利康編「周作人・松枝茂夫往来書簡　戦後篇」『文化論集』(第33号、2008年9月、p103掲載の1965年1月4日松枝茂夫書簡を参照)

なお、安藤が周に宛てた書簡（以下、安藤書簡という）は、周作人の御令孫である周吉宜氏が所蔵、管理している。このように、両者の書簡が現存することは大変に幸運なことであり、お互いが敬意をもって書簡を大切に保管してきたことの証しでもあろう。筆者は、2017 年 9 月下旬に周吉宜氏のご厚意により、安藤書簡を閲覧調査させて頂いた。文房四宝に造詣の深かった安藤らしく、実に凝った美しい便箋や封筒の数々に目を奪われ、丹精込めて丁寧に書かれた安藤の筆跡を手に取り間近に見ると、彼の周への敬愛を改めて思い知るような気がした。いずれの書簡も保存状態が非常に良く、昨日書いたかのように墨痕鮮やかであった。このように大切に保管し続けてきた貴重な資料を快く拝見させて下さった周吉宜氏に、この場を借りて深く感謝申し上げる。また、閲覧場所をご提供くださった中国現代文学館副館長の梁海春氏をはじめ、スタッフの方々へも記して謝意を表したい。北京での調査の成果をあわせ、往来書簡の詳細を【周作人・安藤更生往来書簡細目】にまとめた。参照されたい。往来書簡を通観すると、もっとも古いものは 1943 年の安藤書簡（No,1）で、当時、安藤はまだ北京に住んでいた。その後、交渉は途絶えたようでかなり間隔があき、1950 年代前半は、安藤と周あわせて 3 通（No,2-4）のやりとりがある。書簡が最も集中しているのが、1960 年から 1965 年にかけてである。特に 1961 年は 25 通（No,9-33）と最も多く、1962 から 65 年までは各年およそ 10 通前後の往来が確認できる。これら書簡については、筆者が『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』誌上にて 3 度にわたり翻刻を掲載した[7]。また、2017 年 7 月には北京の中国現代文学研究叢刊編輯部発行『中国現代文学研究叢刊』（第 7 期）誌上に周吉宜整理・陳力衛等訳「安藤更生与周作人往復書信」[8] が発表された。ここでは往復書簡の全通が掲載されており、安藤書簡については中文訳が掲載

7　徳泉さち「周作人・安藤更生往来書簡（1）」（『早稲田大学會津八一記念博物館 研究紀要』Vol,18、2017 年、pp.35～48）、「周作人・安藤更生往来書簡（2）」（『早稲田大学會津八一記念博物館 研究紀要』Vol,19、2018 年、pp.91～110）、「周作人・安藤更生往来書簡（3）」（『早稲田大学會津八一記念博物館 研究紀要』Vol,20、2019 年、pp.73～85）。

されているので参照されたい。

各書簡の内容は様々であるが、おおむね近況報告にはじまり、互いの家族や共通の知人の安否の確認、自身の研究や執筆の進捗状況などが綴られている。安藤は1954年に、『鑒眞大和上傳之研究』により博士学位を取得、翌年には早稲田大学文学部教授となり教鞭をとりながら、日本各地の古跡調査に奔走する多忙な日々を送っていた。1956年11月に會津八一が逝去し、以後は安藤にとって周がただ一人の師と仰ぐ人物となった。安藤は1959年ころより本格化したミイラの調査研究の成果を書簡の中で熱っぽく語り（No,6・10）、周も中国でのミイラの事例を紹介するなど、新たな研究領域の開拓に賛辞を送り、励ましている（No,7・9）。1962年9月には、早稲田大学海外研究員として安藤はフランス、イタリア、ギリシアなど半年以上に及ぶ欧州旅行へと出かけている。No,46・47・48は、滞欧中のやり取りで安藤のパリでの投宿先に届けられている。1963年3月に安藤は帰国するが、その半年後の9月には、鑑真和上円寂一千二百年記念「日本文化界代表団」の団長として訪中する。訪中前後（1963年代）の書簡は、再会への期待と喜びが文面に滲みでる。その他、安藤の息女と周の令孫が切手収集をしていることから、互いの国の切手を同封した書簡も多い。

一方、1950年代後半から60年代初頭頃の周は北京の自邸でギリシア文学と日本文学を精力的に翻訳していた時期に当たる。周書簡では、翻訳予定の原本や関連資料などの日本の書籍がしばしば登場し、それらの購入を安藤に依頼している。書簡で言及されている実に多岐にわたるジャンルの書籍リストは、その時々の彼の文学的興味の方向を伝える貴重な資料ともなろう。なお、安藤は快くその依頼を引き受けたようで、周書簡の冒頭では、無事に本が北京へ届いた旨を報告し、そのお礼から始まるものが多い。周書簡のなかで、最も長文の

8　周吉宣整理・陳力衛等訳「安藤更生与周作人往復書信」（『中国現代文学研究叢刊』2017年7期、178～215頁）

ものがNo,38（1962年4月16日）である【図版1】。4月8日に信子夫人が他界した旨が記され、亡くなる前に夫人は好物であった日本の饅頭を食べたことなどが綴られている。安藤は信子夫人とも面識があったため、この訃報は大きなショックを安藤に与えた。この悲報を受けての安藤の返信がNo,40で、巻紙に毛筆で丁重に悔やみの言葉が綴られている。訪中する友人に和菓子を託し、夫人の霊前に供えてほしいと記している。往復書簡全般を通読し、最も印象深いことは安藤の周に対する強い尊敬の念であろう。安藤自ら、會津八一没後に師と仰ぐ人物は周のみと述べている。安藤書簡では、中国古典の字句を解釈するに当たっての不明点や、中国文物に関する疑問などが書かれ、周は丁寧にそれに返答している。

2015年、島崎藤村や武者小路実篤、谷崎潤一郎など日本の文豪が周に宛てた書簡1500点以上を周吉宜氏のもとに現存することが報じられ[9]、紙上を賑わせた。また、中国文学者である松枝茂夫（1905～1995）と周との往来書簡が翻刻され発表されている[10]。こうした書簡資料が整理、公開されていくことにより今後、周と日本人士との交流の実相がより明らかになっていくであろう。安藤書簡もまた、諸氏の研究に資することになれば幸いである。

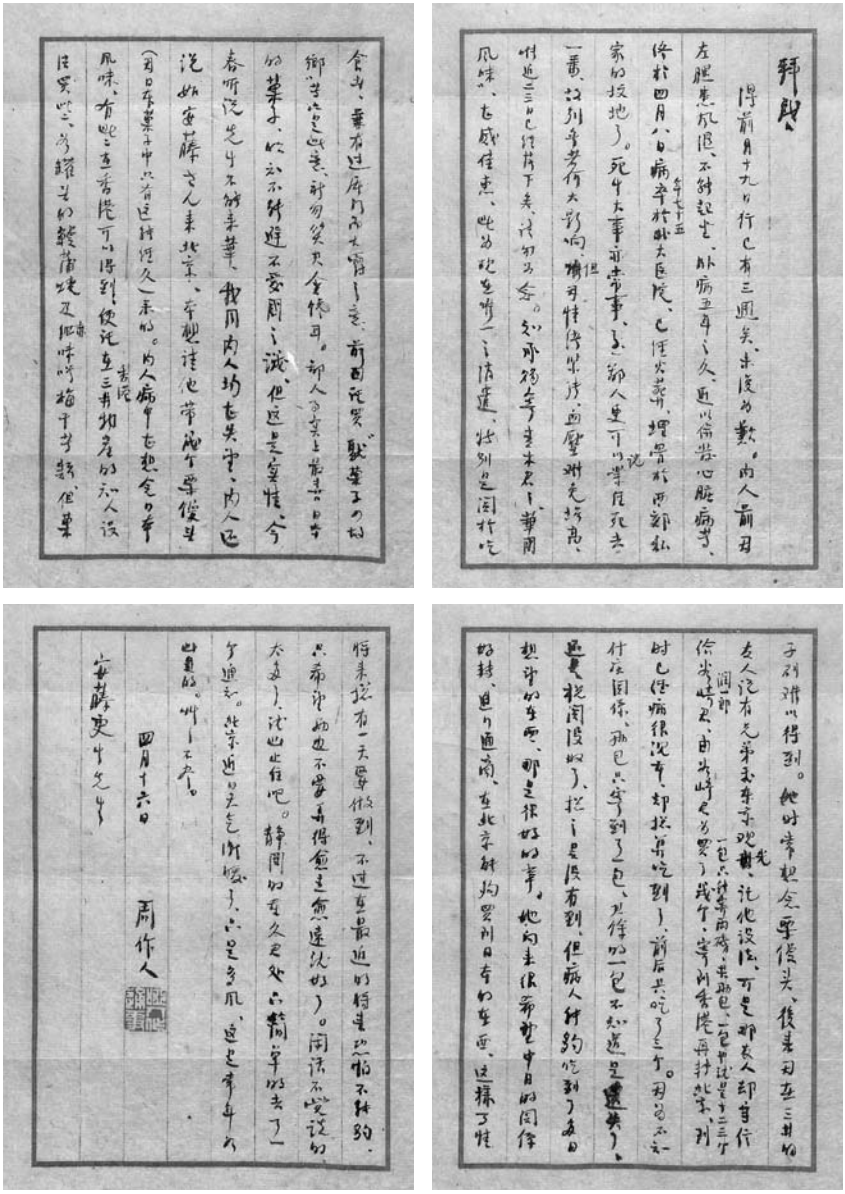
9　「朝日新聞」朝刊1面（2015年3月25日）

10　小川利康編「周作人・松枝茂夫往来書簡戦前篇（1）（2）（3）・戦後篇」（『文化論集』第30・31・32・33号、2007年3月・9月・2008年3月・9月）。なお、ご親族のご厚意により、松枝茂夫に宛てた周作人書簡もまた、會津八一記念博物館の所蔵となった。

【周作人・安藤更生往来書簡リスト】

No	差出人	日時	形式		備考
1	安藤 1	1943 年 3 月 22 日	封書　便箋 10 枚	墨書	Vol,19 掲載
2	安藤 2	1951 年 11 月 17 日	封書　便箋 2 枚	墨書	Vol,19 掲載
3	周 1	1952 年 9 月 21 日	封書　便箋 2 枚	墨書	Vol,18 掲載
4	周 2	1954 年 4 月 13 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,18 掲載
5	周 3	1960 年 10 月 6 日	封書　便箋 2 枚	墨書	Vol,18 掲載
6	安藤 3	1960 年 10 月 19 日	封書　便箋 6 枚	墨書	Vol,18 掲載
7	周 4	1960 年 11 月 19 日	封書　便箋 2 枚	墨書	Vol,18 掲載
8	安藤 4	1960 年 12 月 1 日	封書　便箋 4 枚	墨書	Vol,18 掲載
9	周 5	1961 年 1 月 2 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,18 掲載
10	安藤 5	1961 年 1 月 17 日	封書　便箋 2 枚	ペン書き	Vol,18 掲載
11	周 6	1961 年 1 月 17 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,18 掲載
12	周 7	1961 年 2 月 4 日	封書　便箋 2 枚	墨書	Vol,18 掲載
13	安藤 6	1961 年 2 月 6 日	封書　便箋 3 枚	墨書	Vol,18 掲載
14	安藤 7	1961 年 2 月 12 日	封書　便箋 1 枚	ペン書き	Vol,18 掲載
15	周 8	1961 年 3 月 9 日	封書　便箋 2 枚	墨書	Vol,18 掲載
16	安藤 8	1961 年 3 月 20 日	封書　便箋 4 枚	ペン書き	Vol,18 掲載
17	周 9	1961 年 4 月 19 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,18 掲載
18	安藤 9	1961 年 4 月 27 日	封書　便箋 2 枚	ペン書き	Vol,19 掲載
19	安藤 10	1961 年 5 月 10 日	封書欠便箋 1 枚	ペン書き	Vol,19 掲載
20	周 10	1961 年 5 月 11 日	封書　便箋 2 枚	墨書	Vol,18 掲載
21	安藤 11	1961 年 6 月 5 日	封書　便箋 2 枚	ペン書き	Vol,18 掲載
22	周 11	1961 年 7 月 1 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,18 掲載
23	周 12	1961 年 7 月 8 日	封書　便箋 2 枚	墨書	Vol,18 掲載
24	安藤 12	1961 年 8 月 3 日	封書　便箋 3 枚	墨書	Vol,19 掲載
25	周 13	1961 年 8 月 30 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,18 掲載
26	周 14	1961 年 9 月 29 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,18 掲載
27	安藤 13	1961 年 10 月 8 日	封書　便箋 2 枚	ペン書き	Vol,18 掲載
28	周 15	1961 年 11 月 6 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,18 掲載
29	周 16	1961 年 11 月 10 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,18 掲載
30	安藤 14	1961 年 12 月 3 日	封書　便箋 4 枚	墨書	Vol,19 掲載
31	周 17	1961 年 12 月 14 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,18 掲載
32	安藤 15	1961 年 12 月 16 日	封書　便箋 3 枚	墨書	Vol,19 掲載
33	周 18	1961 年 12 月 27 日付	封書　便箋	墨書	Vol,18 掲載
34	安藤 16	1962 年 1 月 1 日	封書　便箋 3 枚	ペン書き	Vol,19 掲載
35	周 19	1962 年 1 月 20 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,19 掲載
36	周 20	1962 年 2 月 8 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,19 掲載
37	安藤 17	1962 年 3 月 19 日	封書　便箋 1 枚	ペン書き	Vol,18 掲載
38	周 21	1962 年 4 月 16 日	封書　便箋 4 枚	墨書	Vol,19 掲載
39	周 22	1962 年 4 月 22 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,19 掲載
40	安藤 18	1962 年 4 月 28 日	封書　巻紙	墨書	Vol,19 掲載

No	差出人	日時	形式		備考
41	安藤 19	1962 年 4 月 30 日	封書　便箋 3 枚	墨書	Vol,19 掲載
42	周 23	1962 年 5 月 23 日	封書　便箋 2 枚	墨書	Vol,19 掲載
43	周 24	1962 年 7 月 13 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,19 掲載
44	安藤 20	1962 年 8 月 13 日	封書　便箋 3 枚	ペン書き	Vol,19 掲載
45	周 25	1962 年 9 月 20 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,19 掲載
46	周 26	1962 年 10 月 30 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,19 掲載
47	周 27	1962 年 11 月 8 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,19 掲載
48	安藤 21	1962 年 11 月 18 日	葉書	ペン書き	Vol,19 掲載
49	周 28	1963 年 5 月 6 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,19 掲載
50	安藤 22	1963 年 6 月 2 日	封書欠　便箋 2 枚	ペン書き	Vol,19 掲載
51	周 29	1963 年 6 月 19 日	封書　便箋 2 枚	墨書	Vol,19 掲載
52	周 30	1963 年 6 月 30 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,19 掲載
53	安藤 23	1963 年 7 月 2 日	封書　便箋 1 枚	ペン書き	Vol,20 掲載
54	安藤 24	1963 年 7 月 25 日	封書　便箋 2 枚	ペン書き	Vol,20 掲載
55	周 31	1963 年 7 月 27 日	封書　便箋 3 枚	墨書	Vol,20 掲載
56	周 32	1963 年 8 月 10 日	封書　便箋 2 枚	墨書	Vol,20 掲載
57	周 33	1963 年 8 月 17 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,20 掲載
58	安藤 25	1963 年 9 月 11 日	封書　便箋 3 枚	墨書	Vol,20 掲載
59	周 34	1963 年 10 月 21 日	封書　便箋 3 枚	墨書	Vol,20 掲載
60	安藤 26	1964 年 1 月 1 日	葉書（賀状）	ペン書き	Vol,20 掲載
61	周 35	1964 年 1 月 24 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,20 掲載
62	安藤 27	1964 年 2 月 15 日	封書　便箋 1 枚	ペン書き	Vol,20 掲載
63	周 36	1964 年 3 月 9 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,20 掲載
64	安藤 28	1964 年 3 月 17 日	封書　便箋 1 枚	ペン書き	Vol,20 掲載
65	周 37	1964 年 3 月 23 日	封書　便箋 2 枚	墨書	Vol,20 掲載
66	周 38	1964 年 8 月 9 日付	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,20 掲載
67	周 39	1964 年 10 月 25 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,20 掲載
68	安藤 29	1964 年 11 月 7 日	封書　便箋 2 枚	ペン書き	Vol,20 掲載
69	周 40	1965 年月日不明	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,18 掲載
70	周 41	1965 年 1 月 2 日	封書　便箋 2 枚	墨書	Vol,20 掲載
71	安藤 30	1965 年 1 月 9 日	封書　便箋 1 枚	ペン書き	Vol,20 掲載
72	周 42	1965 年 2 月 6 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,20 掲載
73	周 43	1965 年 4 月 30 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,20 掲載
74	安藤 31	1965 年 5 月 25 日	封書　便箋 2 枚	ペン書き	Vol,20 掲載
75	周 44	1965 年 6 月 6 日	封書　便箋 3 枚	墨書	Vol,20 掲載
76	周 45	1965 年 6 月 7 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,20 掲載
77	周 46	1965 年 7 月 6 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,20 掲載
78	安藤 32	1965 年 7 月 24 日	封書　便箋 4 枚	墨書	Vol,20 掲載
79	周 47	1965 年 8 月 7 日	封書　便箋 1 枚	墨書	Vol,20 掲載
参考	安藤 33	1961 年 8 月 17 日	封書のみ　中身なし		



【図版 1】No38（1962 年 4 月 16 日）

3　周作人書作品２点

当館では、安藤旧蔵の周作人の書軸２点を所蔵する。この書は、安藤の熱望にこたえて周が贈ったものである。幸い、その経緯は書簡に残されているため紹介したい。安藤書簡 No,74（1965 年 5 月 25 日）では、周の書を安藤の知人が所有しているのをみて、実に羨ましく思ったこと、さらにぜひ自分も周の書が欲しいと丁寧に依頼している。その依頼に対して、周書簡 No,75（1965 年 6 月 6 日）では、

> （前略）鄭子瑜君曽嘱寫字數紙、只署単款、云係贈人之用、來書所説想即是其一、却已忘記寫的是什広了。如有尊需即当寫奉、唯解放後已有十多年不曽作詩、僅於去年春間作有“八十自嘲詩”一首、内容是純粋打油詩、但有鑒於过去三十年前、因為“五十自寿詩”而引起文人們的圍攻、因此決定不在國内発表、當寫呈尊覧、日内寄奉。北京天气已頗熱了。只是很少下雨、待到七八月中則又是淫雨、令人不堪、但幸而没有什么颶風耳。（以下略）

と記す。また同封された別紙には、

> 再頃已寫得一紙、又找出前為鄭君寫時餘下一紙、係單款者、所寫係廿餘年旧作、今亦一併寄上、請賜査収、但係是「船便」、恐須遅到也。

とも記しており、1965 年に、安藤のもとにこの作品が贈られたことがわかる。さらに、周書簡 No,185（1965 年 6 月 7 日）では、八十自嘲詩の句について説明が加えられている。

> 詩中略有難解之処、稍作説明。日本怪物有山父、一目独足、能知人意、老

狸能幻化屋宇、廣容八疊、色極青新、此皆怪談中所常見。所云対話係指最近譯成之 Roukianos 的著作、中多諷刺詼諧之詞、出語不端謹、古時称撒閏荽、因俗信播种胡荽、須口出穢語、种始繁衍云。

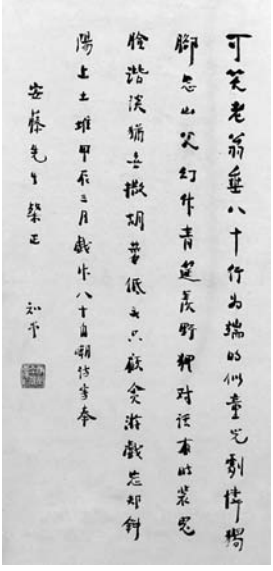
それに対し、安藤書簡 No.78（1965 年 7 月 24 日）では、

我儘なる御願早速お聴届け下され見事なる御染筆を賜りありがたくお礼申しあげます。梅雨明け次第表具させるつもりでをります。本当にありがたう御座いました。

とあり、無事に安藤のもとへ書が届いたことがわかる。以下、安藤旧蔵の 2 点の書の画像と釈文を記しておく。

(1) 八十自寿詩（本紙 63.8 × 31.7cm 軸　紙本墨書）【図版 2】

可笑老翁垂八十　行為端的似童痴
劇憐獨脚思山父　幻作青筵羨野狸
対話有時装思瞼　諧談猶喜撒胡荽
低頭只顧貪游戯　忘却斜陽上土堆
甲辰三月戯書　八十自嘲詩寫奉
安藤先生粲正　知堂
「知堂八十歳以後作」（白文重槨方印）



【図版 2】

（2）苦茶庵打油詩　其四（本紙 52.2 × 18.5cm 軸　紙本墨書）【図版 3】

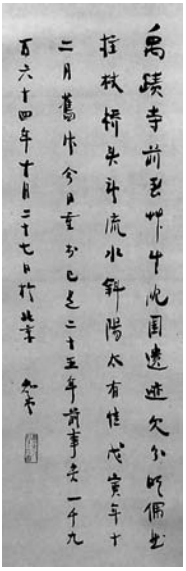
禹蹟寺前春草生　沈園遺迹欠分明

偶然柱杖橋頭望　流水斜阳太有情

戊寅年十二月舊作　今日重書已是二十五年前事矣

一千九百六十四年十月二十七日　知堂

「周作人八十所書」（朱文長方印）



【図版 3】

4　會津八一書「東大寺大仏讃歌」（周作人跋文付き）

1943 年（昭和 18）3 月、會津八一は東大寺を訪れていた。東大寺は、奈良県奈良市雑司町にある仏寺で、8 世紀に聖武天皇（701-756）が国力を尽くして建立した。とくに、寺の本尊であり「奈良の大仏」として親しまれている盧舎那仏は有名である。聖武天皇がこの盧舎那仏造立の詔を発したのが 743（天平 15）のことで、1943 年は詔勅が出されてから 1200 年の記念の年であった。その頃、日本は太平洋戦争の最中で時局は容易ではない状況であったが、東大寺では 1200 年記念の法要が行われた。その法要に当たり、會津は東大寺を詠んだ歌を長巻に揮毫し、大仏に奉納したという。1943 年当時、安藤は北京在住であったが、會津は安藤にも同じ句を書き郵送したという。安藤は送られてきた線装本について下記のように述べている。

「昭和18年は、大東亜戦争の戦局日に日に、邦家の前途まことに憂ふべきものがあった。この時、秋艸道人（會津八一の号）は聖武天皇の東大寺大仏建立の雄図を讃へ、『大仏讃歌』十首を詠じ、これを長巻に揮毫して盧舎那仏に献じた。同時に、別にこれを冊子に揮毫して北京にあった私に送ってくれた。当時用紙すでに払底して、生漉き半紙を綴ぢた冊子であるが、墨気雄渾、古を偲び、今を憂ふる至情紙端に溢れるものがある。私はこの冊に周作人に請うて跋を附して貰ひ、今に寒斎の宝としている。」[11]

安藤は、この線装本を終戦後の困難極まる状況下でも肌身離さず持ち帰ったという。安藤にとっては、敬愛する恩師二人の書が並ぶまさに「墨宝」であったのだろう。帰国後に安藤が誂えたらしく、現在は帙が付属しており大切に保管されてきたことがわかる。冒頭は會津の序文からはじまり、東大寺大仏を詠んだ十首の歌がつづく。その後に、周作人が漢詩一首を寄せている。以下、周の跋文を記す。

「東大寺大仏讃歌」周作人跋の部分【図版4】

「知慙愧」（朱文長方印）「知堂五十五以後作」（朱文長方印）

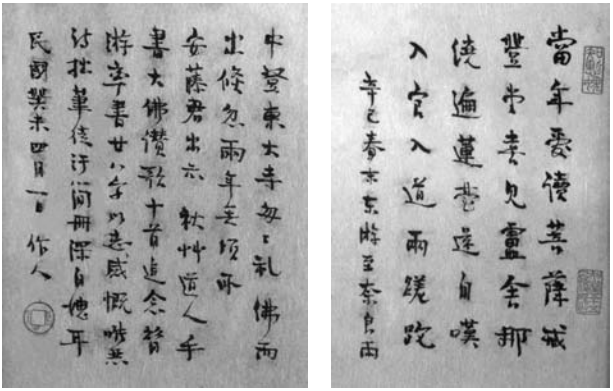
当年愛読菩薩戒　登堂喜見盧舎那

繞遍蓮台還自嘆　入官入道両蹉跎

辛巳春末東游至奈良。雨中登東大寺忽々礼仏而出倏忽両年矣。頃承安藤君出示秋艸道人手書大仏讃歌十首追念昔游卒書廿八字。以志感慨唯悪詩拙筆徒汚簡冊深自愧耳。

民国癸未四月一日　「作人」（朱文円印）

11　安藤更生『書豪會津八一』（二玄社、1965年、p79）より引用。



【図版 4】

1941 年（辛巳春末）、周は華北政務委員会教育督弁の地位にあった。『周作人年譜』[12] によれば周は 4 月 10 日より来日し、東亜文化協議会文学部会議に出席している。4 月 10 日、神戸に到着後京都に移動し、13 日まではほぼ京都に滞在していたようである。4 月 14 日上午には東京へ移動し、18 日に熱海を遊覧の後、19 日には東京をはなれている。『周作人年譜』を見る限りでは、奈良に出かけた記録はないが、おそらく関西に滞在していた 4 月 10 日から 13 日の何時かで奈良の東大寺を訪れたのであろう。それから 2 年後、安藤がみせた會津の大仏讃歌をみて旧遊の地を思い出し、この詩を書いたという。最後の一節では、官僚になるのも仏道に入るのも、どちらも時宜を逃してしまった（「入官入道両蹉跎」）と嘆じている。

會津と周はほぼ同時代を生きた文学者であるが、おそらく直接の面識はなかったことと思われる。二人を師と仰ぐ安藤により、周と會津ふたりの詩歌がならぶ冊が生まれたことになる。安藤はこれを「寒斎の宝」として珍重してきたが、これからは当館の宝となるであろう。

12　張菊香・張鉄栄『周作人年譜』（天津人民出版社、2000 年、pp613-615）

以下に、当資料の概要と會津が揮毫した部分の釈文を掲載する。

會津八一書「東大寺大仏讃歌」【図版5】

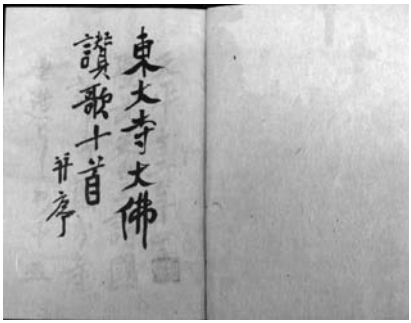
線装本（24 × 17cm）

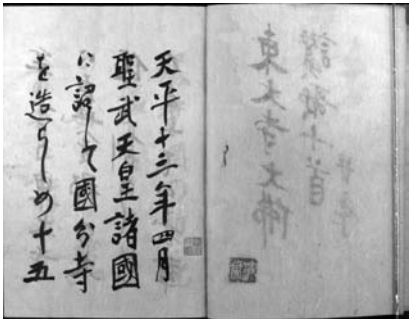
東大寺大仏讃歌十首并序

天平十三年四月聖武天皇諸国に詔して国分寺を造らしめ十五年十月東大寺に盧舎那の大像を創めしめたまふその義華厳梵網の所説に拠りたまへるものの如し予しばしばこの寺に詣で金容遍満の偉観を瞻仰してうたた昔人の雄図に感動せずんばあらず かつて歌一首を成せり曰くおほらかにもろてのゆびをひらかせておほきほとけはあまたらしたりと今日また来りてその宝前に稽首し退いてさらに十首を詠じ以て前作の意を広めんとす邦家今や四海に事多し希くは人天斉しく照鑑してこの聖皇の鴻願をして空しからざらしめんことを

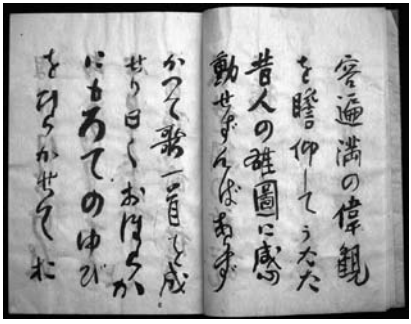
ひんがしの　やまべをけづり　やまをさへ　しぬぎてたてし　これのおほてら
あまたらす　おほきほとけを　きづかむと　こぞりたちけむ　いにしへのひと
みほとけの　うてなのはすの　かがよひに　うかぶ三千だいせんせかい
いちいちの　しやかぞ　いませる千えふ(千葉)の　はちすのうへに　たかしらすかも
あめつちを　しらすみほとけ　とこしへに　さかえむくにと　しきませるかも
くにのむた てらはさかえむ てらのむた くにさかえむと　のらせけむかも
いくとせの ひとのちからを　ささげこし　おほきほとけは　あふぐべきかな
うちあふぐ のきのくまわの さしひぢき　まそほはだらに　はるびさしたり
あまぎらす みてらのいらか あさにけに　をちかたびとの かすみとやみむ
そそりたつ　いらかのしびの　あまつひに　かがやくなべに　くにはさかえむ
昭和十八歳在癸未三月十一日南都客中秋艸道人會津朔　安藤更生先生恵存

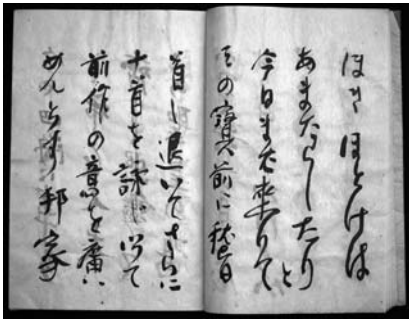
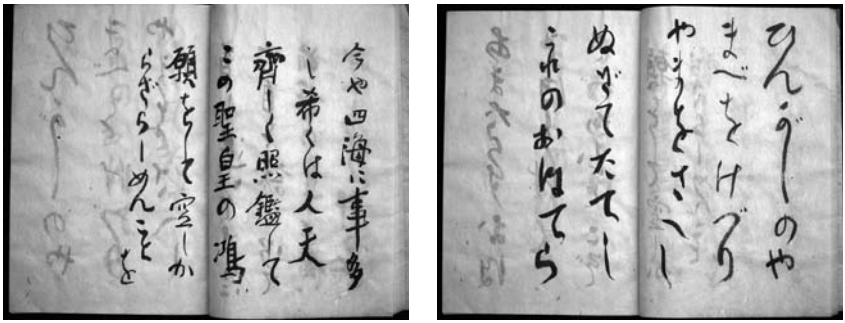
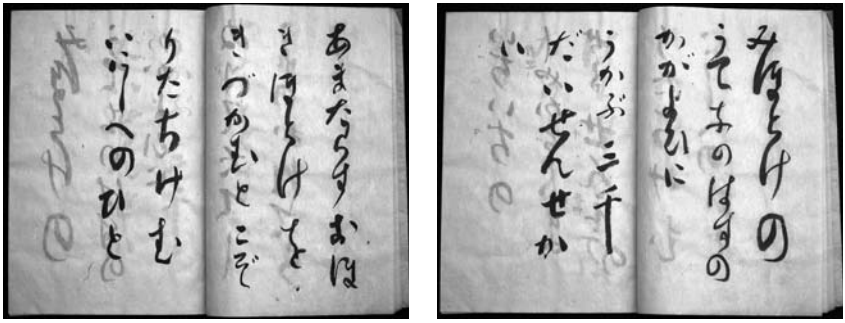
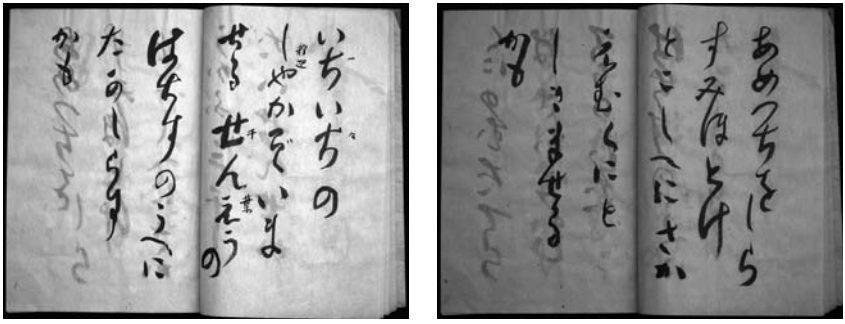
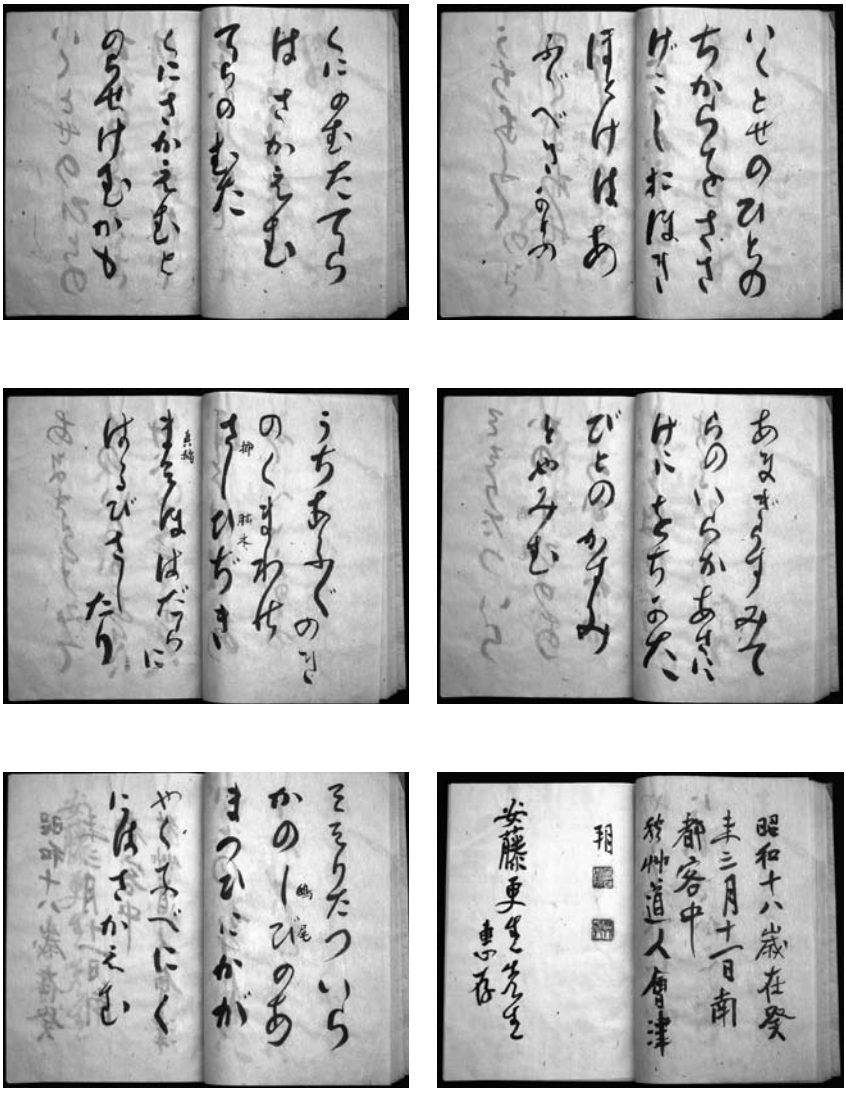
東大寺大佛讃歌


東大寺大佛
讃歌十首
并序


讃歌十首
東大寺大佛
天平十三年四月
聖武天皇諸國
に詔して國分寺
を造らしめ十五

年十月東大寺
に盧舎那の大
像を創めしめ
たまふその義華
嚴梵網の所說
に據りたまへるも
のの如し予屢
この寺に詣で歎


容遍滿の偉觀
を瞻仰してうた
昔人の雄圖に感
動せずんばあず
かつて歌一首しと成
せり曰くおほらか
にしてのゆび
をりかがせて


ほゝ ほとけは
あまたらしたり
今日また來りて
その寶殿前に稽首
し退いてさらに
十首を詠じて
前作の意を廣
めんとす 邦家